



国際條約ヲ廢棄スルニ正当ナル一





國際條約ヲ廢棄スルノ正当ナルヲ

國際條約ヲ一方ヨリ廢棄スルノ權利ハ左

ノ大家ノ徳ムル所ナリ

○第一、^{ハフテ}現時政海列國法第五版千八

百六十七年利行第九十八條

契約者ハ左ノ理由ニ由リ其負擔シタル義務

ヲ免ル、トシ得

一、或ル事情條約締結ノ後ニ發生スルニ再

後繼續シ得メニ^レ継合比^ラ較的ナリトシ條

内 局

約ニ関スル義務ヲ履行スルヲ能ハサル時殊
ニ其義務條約國ノ自己ニ對スル義務ト
相撞着スルカ又ハ人民ノ權利及安寧若
クハ第三者ノ權利ト相撞着スルハ其他
ニ條約締結ノ時既ニ存シ又ハ豫定スル
シ得ヘキ事情ニシテ義務者ノ顯然タル
意思ニ依レハ條約ノ懸念條件トシテ
之ノ變更スルカ

ハフテハ其備考中ニ論シテ曰ク凡ソ一國又
ハ國權ハ其人民ノ運命ヲ指揮整理スル如

ク其一國ノ運命ヲ左右スルヲ得ヘキニ
ノニアラス故ニ彼ノ懸念條件タル「
スタレチブス」(即チ一條約ノ根據トナリ
タル狀況ヲ繼續スルハ無條件ニアラザル)ヲ
懸念スルハ上ノ場合ニ於テ避クヘカラザル
事ナリト云フ
此原則ヲ日本ニ適用スルハ左ノ成績ヲ
生ス
一日本ハ新憲法ノ發布ニ由リ現行條約ノ
義務ヲ繼續スルヲ能ハサルニ至レリ乃チ新

憲法ハ日本統治權ノ施行ヲ定メタルヲ以テ領事裁判權ヲ繼續シ一般ニ外國政府ノ日本統治權ヲ施行スルト新憲法トハ相一致スルヲ得サルニ至レリ

二、領事裁判權ノ繼續スヘキ必要ハ日本ニ於テ強海ノ原由ニ任ヒ完全ナル裁判及行政法ヲ施行スルト共ニ消滅セリ何トナレハ領事裁判權及之ト相密着スル欧米人ノ治外法權等ハ專ラ基督宗國及非基督宗國ニ於ケル政治上及裁判上組織

ノ大ニ相異ナルニ因縁スルモノナレ氏(ブルンチリ)川萬國公法第二百六十九條(日本ニ於テハ此異同最早存セサレハナリ)

○第二、クリエベル直世歐洲列國法(千八百六十一年巴黎條約)第百六十五條

條約ノ効力ヲ失フ場合ハ條約施行上雙方ノ爲メ繼續ヲ必要トスル狀況ノ大ニ變シタル場合ナリ而シテ此條件カ明カニ合意セラルト又ハ條約ノ本性ヨリ自ラ發生スルトナリ同ハサルナリトクリエベルハ此ノ如キ狀

況トシテ一定憲法ノ現存スルヲ揚ケタリ
(備考甲)

又氏ハ第百四十四條備考丁ニ於テ凡ソ一國ハ
緊急權即ケ大難ヲ避クルノ權ニ基キ或
ル條約ノ施行ヲ拒ムヲ得ルヤ否ノ問題
ヲ出シ又自ラ之ニ答ヘテ此問題ハ太古ニ於
テハシツエロ又近時ニ於テハワエヒテル
ト等ヨリ並諾セラレタリト云フ(第百六十四
條丙)

クリエバラスラ唯條約ニ定メアル片ニ限り一般

ノ廢棄權アルヲ恐メタルモノ、如シ(百六十
四條第二)此点ニ付テハ各國條約中ニ存
スル廢棄條款ノ解釋如何ニ在ルノニ而シ
テ之ニ付テハ殊ニ左ノ問題即ケ條約中ニ
明言シタル條約改正ノ要求權中ニ自ラ
廢棄ノ權ヲモ包含セサルヤ否ノ問題ヲ提
出スヘシ此間ニ對シテハ元來此權ヲ包含
スルト答ヘサルヘカラサルヘシ蓋或ル條約ニ
於テ一定期限ノ經過後雙方共ニ改正ヲ要
スルノ權アルヲ明言スル以上ハ條約ハ

雙方ノ意思ニ於テ無限ニ繼續スヘキモノ
ニアラスシテ有限ノモノナルヲテ
明ナレハナリ然レモ若シ條約ノ改正ニシテ
協議ノ方法ヲ以テ成ラサルハ其自然ノ
結果ハ決シテ原條約ハ不定時間ニ有効
ナリト謂フテテ得サルヲ明クナリ何トナレハ
果シテ然ルハ反對ノ一方ハ常ニ他ノ一方ノ
改正案ニ對シ異議ヲ申出ルテニ困リ條約
ヲシテ永遠ノモノタラシムルヲ得レハナリ
是レ改正條款ニ於テ明言セタル雖モ方ノ意

思ニ及スルヲ漏ラ候ナルナリ故ニ條約中ニ
於テ反對ノ明文アラサル以上ハ改正ノ權利
中ニ一方ヨリ廢棄スルノ權利ヲモ包含スル
ヲテ認メサルヘカラス何トナレハ改正條款ハ
原條約ノ有期ノモノナルヘキヲ意味スルヨ
リモ亦他ノ意義ヲ有スルヲ疑ハサルモノナレハナ
リ
例ハ千八百八十五年六月九日ノ清佛條約ニ
於テ左ノ事ヲ約スリ
「現行條約ノ通商ニ關スル規定」弄之ニ屬

スル規則ハ本條約ノ批准書ヲ交換シヨリ
ヨリ十ヶ年間經過ノ後改正スルヲ得但
其年限經過前六ヶ月前ニ條約國ノ一
方ニ於テ改正セシトスルノ志望ヲ申出サル
中ハ通商ニ關スル規定ハ更ニ十ヶ年間効
力ヲ保持スヘシ再後モ亦之ニ準ス

實ニ此條約ニ於テハ十ヶ年間經過ノ後條約
國ノ一方ヨリ改正ノ申出ヲ爲サレハ限
リ旧條約ハ尚其効力ヲ維持スヘキヲ明
言セリ果シテ然ラハ十ヶ年間經過ノ後旧條

約ハ單ニ改正ヲ要求スルヲ因リ其効力
ヲ失フヘキモノナルヲ推定スルヲ得ヘシ
故ニ此場合ニ於テハ改正ノ申出アリ
之ニ付キ雙方ノ協議成ラサル中ニ於テモ旧
條約尚依然効力ヲ有スヘシトハ強ント之
ヲ斷言スルヲ能ハルヘシ此場合ニ於テハ改
正ノ權利ハ同時ニ廢棄ノ權利ヲ包含スル
モノナリト謂ハルヘカラス日本條約中ノ改
正條款ハ斯ク明瞭且確定ニ記載セ
ラレサルモ正直ノ方法ヲ以テ之ニ異ナルノ

解釋ヲ為スルヲ得ス凡ソ國際條約ノ履行ハ信義ト信仰トニ因リ成ルモノナリ而シテ如何ナル條約國ナリトモ專ラ其自己ノ利益及見解ノニ依リ解釋スルノ權利アラサルモノナリ是故ニ關係國ノ目的トセサル無期ノ繼續ヲ條約ニ予ヘ以テ專ラ一國ノ損害ヲ來サントスル解釋ハ之ヲ為スルヲ許サズ凡ソ條約ノ改正ハ二個ノ効用ヲ目的トスルモノナリ即チ第一旧條約ノ廢止第二新條約ノ締結是レナリ此二個ノ効用ハ互ニ相

須チ第一ノ効用ハ第二ノ効用ニ由ルニアラザレハ生セサルト云フカ如キモノニアラザルハ勿論ナリ可トナレハ新條約ノ締結ハ如何ナル場合ニ於テモ雙方ノ合意ヲ要スレバ旧條約ノ廢棄ハ状況ニ依リ一國ノ意思ニ由リ之ヲ為スルヲ得レハナリ殊ニ一方ヨリ條約ヲ廢棄スルト雙方互相ノ承諾ニ由リ條約ヲ廢止スルトテ混同スヘカラス ①相互ノ承諾ニ由レル廢止ハ如何ナル場合ニ於テモ當然ノ事ナレハ之カ為ノ別ニ規定ヲ設クルヲ容モズ之ニ反

一方ヨリノ廢棄權ハ一定ノ條件ニ拘束
セラルカ又ハ條約ニ於テ之ニ雙方ニ平フルヲ
得ルモノナリ若シ或ル條約ニ於テ一方ヨリ
改正ヲ要求スルノ權利ヲ雙方ニ予ヘラレ
シナラハ此權利タル特別ナル條約上ノ規定
ニ依ルモノナレハ雙方ノ合意ヲ以テ條約ヲ
廢止スルカ如キ普通ニシテ且当然ナル權
利ヨリ大ナル價直ナカレハカラス又此權
利タル一方ヨリ特別ニ施行スルヲ得ル
ク而シテ其効力ハ他ノ一方ノ承諾ニ支配

セラレサル所ノ權利ヲラサルヘカラス若シ否
ラサレハ此ノ如キ條約上ノ規定ハ殆ト有
名無實ノモノナリ何トナレハ他ノ一方ハ新
條約ニ對シ一方ノ承諾スルノ見込ナキ條
件ヲ提出シ以テ隨意ニ之ヲ妨クルヲ
得レハナリ若シ此ノ如キ場合ニ於テ新條
約ニ付キ合意成ラサル中ハ改正ノ請求ハ
同時ニ旧條約ノ廢棄ヲト解セサルヘカラ
ス是レ即チ改正ノ請求權ノ効用ナリ而シ
テ其權ハ改正條約ニ基キ各方ノ有スル所ノ

モノト認メサルハカラス若シ人此解釋ニ同意
セサルキハ條約國ノ各方ハ有限ノ年月ニ向テ
締結ニタル條約ヲ新條約ニ對スル反對說
ニ由リ無限永遠ノ條約トスルノ權利ヲ有ス
ルモノト認メサルハカラス是レ法ノ原則ニモ適
カス又總テノ國際條約ヲ支配スル良意ニ
モ合ハサルモノナリ

是ニ由リ之ヲ觀レハ凡ソ條約中ニ一定期
限ノ後條約ノ改正ヲ請求スルノ權利ヲ認
メラレタル片ハ一方ヨリ此ヲ條約ヲ廢棄スル

ノ權利ヲモ其中ニ網羅スルト認メサルハカ
ラストノ說其當ヲ得タルモノト謂フヘシ此原則
タル一目甚ク嚴酷ナルカ如キ觀アリト雖モ左
ノ一言ヲ附加スレハ決シテ酷ナリト謂フテ
得ス乃テ此ノ如キ場合ニ於テハ各方ハ當ニ
廢棄ノ權利ヲ有スルノミナラス同時ニ亦新條
約ノ談判ニ應ジ成ルヘク他ノ一方ト新條約ノ
成立ニ同意スルノ義務アリ但其義務ナル或
ハ他ノ一方ノ條件ニ服スルカ或ハ旧條約ヲシ
テ不定時間ニ繼續セシムルヲ承諾スヘシ

ト云フニアラス何トナレハ改正ヲ請求スルノ權
利中ニ新條約ヲ結フニ當リ自己ノ立脚ノ地
及自己ノ利害ヲ有効ニ維持スルノ權利ヲ
当然含有スレハナリ又此ノ目的ノ爲メ旧
條約ヲ廢棄スルハ時宜ニ依リ條約改正
ノ請求中ニ包含セラレサルヘカラス若シ否ラ
サレハ新條約ハ完全ナル自由ヲ以テ締結ス
ルヲ得サレハナリ

①ヒルモール(萬國公法釋義第二卷第七十
七頁以下)ハ條約ヲ一方ヨリ廢棄スルハ

反對ヲ表シ且唯民法ニ於テ相當ナル契約
廢棄ノ理由ヲ國際條約ニ適用セント欲シ
逐ニ之ヲ混同セリ尚後ニ説ク所ヲ参照ス
ヘシ

○第三、*von* *Trinius* (萬國公法千八百七十四年
發行佛文第二版)ハ左ノ如ク論セリ

第四百五十四條 凡ソ條約ハ條約ニ於テ明言
セラレカ又ハ狀況ニ由リ廢棄權ノ生スルハ
唯一方ヨリノ廢棄ニ由リ消滅スルモノトス
其注ニ曰ク縱令廢棄權ノ定メナキモ一定

ノ場合ニ於テ條約ヲ廢棄スルノ權アルヲ
認ルルハ萬國公法ノ本性ヨリ生ズル必
要ナリ抑一國ノ安寧ハ條約ニ由リ妨害
セラルヘキモノニアラス又現世ノ者ハ後世ノ
者ヲ永遠ニ拘束スルヲ得ヘキモノニアラス
又縱令一國ノ代表者後世ノ者ヲ永遠ニ
拘束スルヲ得ルモ此權利タル絶對的ノモ
ニアラス而シテ一國ノ代表者ハ將來永久
ニ對シ時運ノ進行ヲ妨クルノ權力ヲ有ス
ルモノニアラスナリ條約ノ永久ナルヲハ恰モ

憲法ノ永久ト同ク不合理ノモノナリ此二者
ハ事物ノ本性ニ適セズ且人類世界及萬國
ノ間ニ生ズル變化ノ理ニ合サルモノナリ故ニ
此二者ハ法理ニ矛盾ス云々

第四百五十五條 一條約國カ其義務ヲ尽サ
ズ又ハ條約ヲ破ルルハ之カ爲メ損害ヲ受テ
タル條約國ハ條約ノ拘束ヲ免レタルト認ム
ルノ權利アリ

第四百六十五條 條約ノ公認若クハ默認基礎
タル狀況漸ク變シテ爲メニ條約ハ其意義ヲ

失フカ又ハ其條約ヲ施行スル下ノ却テ事物
ノ本性ニ矛盾スル片ハ條約遵守ノ義務消滅
セザルヘカラス

本條ニ既ニ上ニ述ヘタル原則即チ一條約
ノ基礎タル狀況ハ變更スルニアラザレハ継
續スルモノナリトノ說ニ關係スルモノナリト
ルンテリト曰ク此ノ政治上狀況ノ變更ハ條
約ノ無効ヲ来スヘキモノニアラスト蓋シ數
多ノ變更ハ一國ニシテ現時ノ事實ト適合
セザル所ノ條約ヲ守ルノ義務ヲ免レシムル

モノナリ若シ一定ノ狀況カ條約現存ノ基
礎及條件ナリシ場合ニ於テ其基礎破
レタル片ハ同時ニ條約ノ効力消滅スト論
シ其例トシテ左ノ場合ヲ掲ゲタリ例
ハハ條約ニシテ一國人民ノ「カトリク」若クハ
「プロテスタント」宗ナルノ事實ニ基ク場合
ニ於テ人民其後其宗旨ヲ變更スル片
又ハ條約ニシテ一國ノ政体カ君主政治
若クハ共和政治ナルノ事實ニ基ク場合ニ
於テ其後政体ニ變更アル片ハ隨テ條

約ノ効力消滅ス云々
第四百五十八條 條約ノ規定ニシテ一國制度
若クハ一國民法ノ必要ナル違反ト併立
スルヲ得サルニ至ルハ其國ヨリ條約ノ
廢棄スルヲ得

注ニ曰ク國際條約ハ法シテ一國ノ制度及
權利ヲ侵違スル永久ノ妨害トナルヘカラ
サルモノナリ凡ソ邦國ハ其生存ヲ維持シ
且其必要ナル違反ヲ鞏固ニスルモノナ
レハ其曾テ今日ト主義ノ相異ナル時代

ニ於テ外國ト正結ヒタル羈絆ヲ脱スルノ
自由ヲ有ヒサルヘカラス此真理ヲ爭フハ
恰モ本條ヲ形式ノ犧牲ニ供シ且條約ノ
信義ヲ兵レテ自殺スルモノト謂フニ蓋
後生ノ若シ先生ノ者ヨリ拘束スラレバ
此其如シキ事ニシテ其時八百六十年十月
九日英皇國ノ憲法ニ曰ク一國ノ權利ニ條
約ノ條約ニ依リて侵スルモノナラズ云々
第四百六十條 一國ニシテ其責任担ヒ
煩シキ義務ヲ履行スルハ其責任担ヒ

得ルト云々條約履行ノ爲メ其國ノ公法
及生存ヲ犠牲ニ供セシムルノ義務ヲ一國
ニ負シムルヲ得ス

○第四 ワッテル 萬國公法 (千八百五十九年ヒ
ラテルヒヤ刊行) 第二卷第十五章第二百
二十二條

曰ク吾人ノ條約上信義ノ主義ヲ主張シ
ノニ各國ノ權利ニ屬スル自由及獨立ヲ害
スルニ至ラサルヲニ注意セサルハカラズ若シ
主權者其條約ヲ破リ又ハ之ヲ履行スル可

ヲ拒ムルハ此事タル直クニ主權者カ條約ヲ
有名無実ノモノト認メ又ハ條約上ノ信義
ヲ蔑視シタルヲ証明スルモノニアラス焉
ニソ知ラン主權者ハ或ハ其義務ヲ免ルハ
ノ正当ナル理由ヲ有スルヲ而シテ他ノ主
權者ハ此事料ヲ裁断スル權利ナシ但若
シ主權者ニシテ公然タル隨意ノ口實ヲ以テ
其義務ヲ破リ又ハ毫モ其所爲ニ相当ナ
ル制裁ヲ作クルノ口實ヲ設クルヲ必要ト
セサルモノナルハ是レ人類社會ノ敵ト認

ハナリ
是ニ由リ之ヲ觀シハワツテモ亦一定ノ場合
ニ於テ條約ノ廢棄ヲ許スヘキモノナルヲ認
メ唯之ヲ爲メ適當且必要ナル原因アリ
ヲ要セリ氏ノ説ニ依レハ此場合ニ於テ外國
ハ之ヲ裁おスルヲ得ル自國ニ於テ法斷
セサルヘカラス何トナレハ如何ナル邦國トモ
モ其國ノ利害ニ付外國政府ヲ以テ終
審裁官ト認許スルヲ得サレハナリト
云フ蓋主權國ノ上ニハ共同ノ高等裁官

官ナルモノ存セズ又對テ國ノ主張ハ裁判ノ
効力ヲ有セサレハナリ是故ニ又國際條約
廢棄ノ正当ナル理由ハ民法上ノ理由(思
怖強迫、詐欺)ノシニ制限スルヲ得ス凡ソ
國家ノ生存及其興廢ニ侵スル利益ハ他
ノ方法ヲ以テ實行スルヲ得サル以上廢
棄ノ十分ナル理由ト看做サレハカラス是
レ獨立國ノ自衛自防ニ關スル性法上ノ主
義ヨリ自ラ生スルモノナリ

○第五 *Head Note* 萬國公法(千八百七十八年)

倫敦刊行)第一卷第二百四十三條

條約上ノ義務ハ縱令其字句ニ依リ永続
ス(キモ)ナリト雖モ條約國ノ一方カ獨立國
タルノ位面ヲ失フタル片又ハ其内部ノ制度
變シテ條約ヲ新秩序ノ上ニ適用スルコ
ト得カル片ハ消滅ス

○第六ホウエトシ萬國公法要論(千八百八

十年倫敦刊行)第二百七十五條

條約ハ左ノ場合ニ於テ消滅ス

第一一國政治上ノ制度變シタルカ爲メ

條約ヲ締結セタル時ト全ク異ナル狀況
トナリ條約ヲ適用スルコト能ハサル片

第四期限ノ経過スル片(但シ明示ノ合

意ニ依リ繼續シタル片ハ此限ニ在ラス)

又ハ條約上ノ義務当該者ヨリ履行セ
ラルル片又ハ狀況一變シテ最早義務ヲ

負シタルコト能ハサルニ至ル片

○第七ホール萬國公法ノ條約論(千八百八十四年

ヲクスフヲルト刊行)第三百十九頁以下

條約ハ左ノ場合ニ於テ無効トナル

第三、廢棄ノ權ヲ雙方ノ適宜ニ任カス明
約ナル片又ハ同盟、通商條約、卸便條約ノ
如キ其條約上ノ性質ニ於テ永遠ノ効用
ヲ有セサルモノニシテ條約者ノ意思ニ從
ヒ解約スルヲ得ル片ハ之ヲ廢棄スルヲ
ニ因リ

第四、條約ノ履行ヲ爲シ能サル片

第六、爭フヘカラサルノ法則若クハ一般ノ
德義上ノ原則ニ變更ヲ求シ爲メニ條約
ハ一國ノ普通義務ト併立スルヲ得サ

抑條約ヲ廢棄スルヲ得ル條件ヲ確定
スルハ決シテ容易ノ事ニアラス然レモ
ニ明瞭ナル原則アリ之ヲ正直ニ適用スル
片ハ一定ノ場合ニ於テ權利ノ有無ヲ十分ニ
証明スルヲ得ルモノナリ即チ其原則ハ
左ノ如シ如何ナル條約國ト至レ條約締
結ノ際目的トシタル條件ヨリ他ノ條件ニ
由リ隨意ニ義務ノ効用ヲ得スルヲ得ス
又條約ハ其締結ノ條義務ノ默認條件

ナリシモノ大ニ変スルハ効力ヲ失フモノナ
リ是故ニ如何ナル懸念條件(前置條件又
ハ基礎)ニ由リ國際條約ノ締結セラレタル
ヤ否ヲ確定スルヲ必要ナリ若シ此條件ヲ
發見シタルハ隨テ由テ以テ條約ヲ廢棄
スルヲ得ル所ノ理由ヲ見出スルヲ得、シ
此ノ理由ハ第一、雙方ニ於テ條約ノ重キナル
箇條ヲ履行シタルヲ第二、條約ノ一國自衛
ノ權利ト相撞着スルヲ第三、條約ニ定メタル
物件ニ關シ一國カ引續キ獨立スルヲナリト

ス
又ニ一ノ注意スヘキハ英國ノ著者ハ通常
其政府及其國ノ利害ヲ根據トシテ立論
スルノ癖アリ故ニ千八百七十年露國ノ事件
以來ハ務メテ廢棄權ヲ制限センヲ試
ミタリ然レモ以上叙述シタル原則ハ其他
ノ著者ノ採用シタル原則ト一致セシムル
為ノ十分ニ適用スルヲ得ルモノト不故ニ
ホール及其他ノ著者カ上ノ原則ニ基キ露
國政府ノ所為ハ條約ヲ破リ且萬國公法ニ

背キタルモノトノ烙印ヲ置カント欲スルモ
若シ英國利害ノ点ヨリ條約ノ廢棄ヲ辨
解セント欲スルハ或ハ他ノ方法ヲ以テ此
原則ヲ解釋スルナキヲ必シ難シ唯對手
國ニ限リ他ノ條約國ヲシテ條約ノ義務ヲ
免セシムルヲ得ルトホールノ說ハ全ク謬
リナリ何トナレハ相互ノ合意ニ因リ條約ヲ
廢棄スルハ全ク別問題ニ屬シ既ニ上ニ論ス
ル如ク一方ヨリ廢棄スルノ權利ト混同スル
ヲ得サレハナリ其他此說ハ外國ヲシテ一

國ノ生存ニ關スル利害ノ裁判官ト為スモノニシ
テ凡ソ萬國公法及政治ノ原則ニテ指セリ

○第八 ^{Carquhart} フエルゲン^の萬國公法必携第二卷(倫
敦千八百八十四年出版) 第百三十六條 第百
三十七條

氏ハ第一ニホールノ論ニタル意見ヲ再應揭載
セリ然レモ遂ニ凡ソ萬國公法上ノ條約ハ獨
リ相互ノ良意ニ淵源シ得ルモノナレハ其
條約ハ已ラテ得サレハ廢棄シ又ハ改正セサ
ル可ラス何トナレハ條約ハ時運ト共ニ榮達

スル慣習ニ従フノ彈力ヲ有セ且自ラ之ヲ
改正スルノ能力ヲ有セサレハナリ抑實物上ノ
利害カ徳義上ノ見解ト符合スル間ハ條約
ニ依リ員フタル相互ノ義務ヲ確實ニ履行
スルハ自然ノ職務ニシテ且又容易ニ履行ス
ルヲ得ヘキ義務ナリ然レハ人類社會ノ
進歩ハ自然ノ道義ノ法則ニ従ヒ常ニ萬
國公法ノ精神ヲ變更スルモノナリ而シテ
其精神ハ萬國相互ノ交通及各種ノ
公法上ノ條約ニ於テ表彰セラルモノナリ

實ニ此關係ニ付テハ公法上ノ條約ハ文明
開化ノ軌道ニ於テ進歩若クハ退歩ヲ表
スルノ目標ナリ故ニ若シ條約ニシテ萬國公
法ノ精神ニ依リ生シタル實際ノ條件ヲ
ル相互ノ合意ト符合セサルトキハ其條約
ハ当然變更セラレザルヲ得ズ斯ノ如キ
條約ノ欠缺ハ早晚其効力ヲ失フニ至ルハ
シ而シテ若シ相當ノ時ニ於テ廢止若クハ
變更セラレザルトキハ遂ニ此不十分ナル條
約ヲ破ルニ至ルヘシ云々著者ハ此主意ニ

是よりハフテルブルンチエリトノ説ヲ相多ナリ
ト認メ又フヒオールの説ヲモ引用セリ其説
ニ曰ク凡ソ一國ノ道義及徳義ノ自由發達
ニ反對スル條約ハ無効ト認ムハレ而シテ此
ノ如キ條約ハ此原則ニ基キ濫ラ道義ニ
背キ不止ニシ且價直ナキモノト認メサル可
カラス云々又フヒオールの氏ハ此問題ハ公平ナ
ル仲裁ヲ判ニ依リ之ヲ處分セサル可カ
ラナルヲ論セリ然レモ余ノ説ニ依レハ
現行法則ニ關スル問題ノ裁是ノ如クニ

限ラス僅ニ一國ノ生存上ノ利害ヲ判断スル場
合ニ於テハ仲裁ヲ判ヲ適用スルヲ得ス何
トナレハ此判断タル他國ノ判決ニ信行スル
ヲ得混サレモノナレハナリ又此ノ如キ場合ニ
於テ現今ノ強國カ悉ク訴訟事件ニ對
テトシテ干渉スルニ於テハ其判断尤困難ナ
リ窮ルニ至ルハシ
フアルケリシハ大抵ニ於テ凡ソ條約ニシテ一國自
然ノ發達ニ由レル實際ノ情況及一國ノ生存
ニ關スル利害ト係行スルヲ得サルハ其

効力ヲ失ハサルヘカラサルトノ原則ヲ主
張セリ

以上論述スル此ノ此原則ハ萬國公法著者
ノ最著名ナル大家ヨリ理論上ニ於テ公
認セラレタルヲ以テ今ヤ進テ近世實例ノ
一二ヲ掲テ以テ各國政府ハ萬國公法上ノ
關係ニ於テ此原則ヲ適用シタルヲ明示
セント欲ス

第一千八百五十六年三月三十日巴里條約ニ
依テ定メラレタル黒海ノ局外中立ニ關ス

ル露國政府ノ態度ニ付ニ最モ提出シタ
ル意見ニ於テ其大要ヲ陳述セリ
此條約ノ第十一條ニ曰ク黒海ハ局外中立
タルヘシ黒海ハ萬國ノ商船ニ對シテ開ク
モノナリ然レモ其海上ニ港灣ハ軍艦ニ
對シテハ海岸國若クハ其他ノ邦國ノ軍
艦ナルヲ向ハス令ク且ツ將來永遠ニ之
ヲ閉鎖ス但シ本條約第十四條及第二十
九條ノ例外ノ場合ハ此限ニアラス

千八百七十年十月十九日露國政府ハ此ノ條

約ニ調印シタル諸國ニ公文ヲ發シ以テ是
海ニ於ケル露國海軍ノ制限ヲ奏章セ
リ而シテ其理由トシテ重ニ左ノ三件ヲ
提出ス
一條約ハ他ノ各國ヨリ十分ニ履行セシ
テ九事何トシレハ外國ノ軍艦性々黑
海ニ入ルルヲ許サレタレハナリ
二條約ハ露國ノ容令ヲ大ニ危クシ其
重要ナル主權ヲ毀損シタル事
三條約ノ完結以來歐洲ノ政治上ノ情況

一般ニモ又タニエトブノ諸國ニ關シテモ變
更シ且ツ此情況ハ條約ノ締結セラレタル
所ノ條件ト一對セサル事
此宣言ハ通ニ關係ノ諸國ヲシテ倫敦ニ
會合セシノ其會議ニ於テ議論ノ末一同
承諾ノ上露國及土耳其ニ彼ノ義務ヲ
免除スルヲ認メタリ然リ而シテ各國ハ
會議ノ始ニ於テ英國大臣ノ發議ニ依リ
左ノ宣言ニ調印セリ即チ
各國ハ協議ノ上他ノ條約國ノ承諾ヲ得

ルニアラサレハ條約ノ義務ヲ免除シ又ハ
之ヲ変更スルヲ得サル事

此宣言タル上ニ述ヘタル萬國公法大家ノ
語ナル原則ト全ク相矛盾スルノ觀ア
リ茲レハ此宣言ハ唯之ニ補即ニタル諸
國ノミヲ拘束シ其他ノ諸國ヲ拘束スル
ヲ得ス又萬國公法ニ於テ公認セラレ
タル原則ヲ全ク破壊スルヲ得ス此論
ニ付テハ暫ク之ヲ問ハサルモ此宣言ニ依
リ一方ヨリ條約上ノ義務ヲ免ルノ說ヲ

全ク破壊スルモノニアラス唯他ノ一方ノ協議
ニ拘束セシメタルノ理由是觀之爰ニ政府
アリテ煩雜ナル條約ヲ絶ント欲スル片ハ之カ
爲ノ先ツ他ノ一方ノ協議ヲ求ムヘキト及其
政府可成協議ヲ爲スノ手段ヲ尽シタルモ
一方ノ承諾ヲ得サルトキハ其政府ハ既ニ其
義務ヲ尽シタリト推定スルヲ得若シ然
ラサレハ双方ノ合意ニ依リ條約ヲ廢止スル
トト已ムヲ得サル必要ニ依リ條約ヲ廢棄
スルトトノ間ニ是レ之區別アルヲ見ニ是レ實

ニ英國政府ハ此問題ヲ解釋セント欲シク
ル所ノ意義ナルヘシ實ニ千八百七十年十一月
十日ヲ以テ露國ノ宣言ニ對シテ發表シタル英國
ノ公文ニ曰ク爰ニ一ノ問題アリ其問題即チ
露國ノ發表シタル欲望ニ滿印ノ諸國ヨリ精
密ニ且ツ親睦ノ精神ヲ以テ之ヲ調査スヘキヤ
否ノ問題ニアラズ其問題ハ實ニ滿印ノ諸國ハ
露國カ他國ノ承諾ヲ得スレテ自己ノ意志ニ依
リ公式ノ條約ヲ廢棄シタル宣言ヲ受クキモノナルヤ
否ニ在リ(中畧)若シ露國政府ニシテ此ノ如キ宣言

ヲ為スバリニ英國及他國ノ政府ニ通シ此宣言ハ
果シテ條約ノ毀損ト均シキモノニ類スルノ嫌ヒナキヤ
又ハ彼ノ條約ハ事情一變シタルカ爲メ不當ニ露
國ノ困難ヲ來シタルモノニアラサルヤ又ハ其條約ハ
時運ノ變遷ト共ニ古ノ防禦スル爲メ不用
トナリタルニアラスヤ等ノ事ニ付協議ヲ遂ゲタラン
ニハ英國政府ハ其他ノ各國ト協同シテ此問題ヲ
調査スルヲ拒マサリシナラシ云々又英國政府ノ宣言ノ
意義ニ千八百七十年十一月廿八日ヲ以テ英國大臣ト露
國使節トノ間ニ成リタル談判ヲ記載シタル公文ニ依

テ尚一層明瞭ナルヲ得ヨリ其公文曰ク露國ハ屢此問題ニ付共同ノ相談ヲ爲シ以テ其目的ヲ達セントスルヲ試ミタレ其効ヲ奏セサリシトテ主張セリ然レ氏此談判ハ實際ニ於テ露國ハ千八百五十六年ノ條約ノ改正ヲ達セシカ爲メ一面モ英國ニ相談セサルヲ証セリ又此談判ヲ見レ若シ露國ニ此ヲ條約ノ諸國ニ改正ヲ正直ニボシテ尚其成績ヲ譽ルニ至ラザリシナラハ英國ハ露國ノ條約ヲ廢棄セントスルノ權利ヲ認メタリレナラシ是ヲ以テ英國ノ反對ニ事件ニ對スルヨリハ寧ロ其方

亦ニ圖セリ即豫メ改正ヲ爲スノ談判ヲ爲サスレテ突然一方ヨリ廢棄ヲ爲シタルノ方式是レナリ而シテ千八百七十一年ノ倫敦會議ノ目的モ亦斯ノ如ク改正ノ談判ヲ爲スニ外ナラザルナリ而シテ露國ノ條約ヲ廢棄シタルノ正当ナルヤ否ニ付テハ爭ハレサルナリ何トナレハ之ニ圖スル條約ノ規定ハ既ニ久シク不当且不利ニシテ露國ノ永ク服従スルヲ得ヘキモノニアラザルヲ恐メラレタレハナリ
(ヒリモール第國公法第二版第二卷第七十四頁)
由是觀之倫敦會議ニ於ケル宣言ハ寧ロ上ニ論シ

タル理論即豫ノ改正ノ控藩ヲ為スモ其功ヲ奏セサ
ルトキハ條約ヲ自由ニ廢棄スル權利ヲ生スルイッ
證明シタルモノナリト謂フヘシ但シ其廢棄ニ善
良ニシテ且ツ必要ナレ理由ニ基カサルハカラサルモノ
ナリ

第二千八百五十二年五月八日附丁抹ト墺國、佛
國、英國、普國、露國及瑞典トノ間ニ結ヒタル倫
敦條約ハ丁抹國(當時獨逸ノ聯邦ニ屬スル
公國)ニエレスウ井久オルスタインヲモ範(トテ)維持
スル事トシエレスウ井久、ホールスタイン、グリユクスブルク

州クリスチアン公ノ丁抹王位繼承權ヲ認メタリ
此ニ州ハ丁抹王國ト特別ナル國法上ノ關係アリ
リテ單ニ丁抹ノ領地ト見做スヘク得サリキ
然レ此州關係ハ其後各種ノ布告雖ニシエレ
ヌウ井久、ホールスタインニモ適用セララルヘキ憲法
ノ發布ニ依リ丁抹國王ヨリ毀損セラレタ
リ故ニ字漏生ハ既ニ千八百六十四年一月二
十日ノ公文ヲ以テ豫ノ意ヲ示シタル後同年
五月十五日ノ公文ヲ以テ倫敦條約ヲ廢棄
セリ何トナレハニエレスウ井久、ホールスタインニ

對スル丁株國ノ義務ハ千八百五十一年乃
至千八百五十二年ノ協議ニ基キ倫敦條
約ト密着シテ相離ルハカラサルモノナルニ
其條約ハ丁株國王ヨリ毀損セラレ為ノ
ニ倫敦條約ノ義務ノ重要ナル條件
既ニ消滅シタルハナリ殊ニシユレスウ
クホールスタインニ於ケルクリスタル
繼承權ハ丁株國法ニ從ヒ必要ナル法
律上ノ認許ヲ得有スルニ至ラサレハナリ
是ニ於テカ倫敦ニ於テ會議ヲ開キタリ

然レ其成績ヲ舉クルニ至ラサリキ而シテ
英國ハ寧國ノ廢棄權ヲ非難セリ何トナ
レハ寧國ハ獨リ丁株ニ對スルノミナラス高
其地條約ニ調印シタル諸國ニ對シテ拘
束モラル可キモノナレハナリ然レ其廢棄ノ
正当ナルトニ付テハ別ニ會議ヲ開クニ至ラ
サリキ蓋シ當時寧國ハ既ニ丁株ト開戦
シ而シテ戰爭ノ結果ハシユレスウホール
スタインヲ丁株ヨリ驅キ逐ニ寧國ニ合謀シタ
レハナリ
第三 千八百五十年三月十九日ニ於テ當時ノ計畫

ニ係ル中央亞米利加ヲ通過スヘキニカラグア
運河ニ関シ合衆國ト英國トノ間ニ條約(所
謂「クライトン・ブルバ條約」)ヲ締結シ以テ
西國ニ其運河ニ於テ政治上若クハ軍
事上ノ監督ヲ爲シ且ツ此地ニ於テ領地ヲ
占領スルノ特權ヲ放棄スルヲ約セリ又其
條約ニ第八條ニ於テ「兩國ニ將來ノ條約上
ノ規定ニ依リ中央亞米利加ノ地峽殊ニ
今日設計セラレタルホアンテペック又ニパナマ
ノ線路ニ於テ他ノ通路即鐵道若クハ運

河ヲ共同ニ保護セルトノ一般ノ主義ヲ明言
セリ
然ルニ當時ノ設計ニ係ルニカラグア運河
ハ遂ニ成功ニ至ラザリシヲ以テ條約ハ第八
條ヲ除クノ外自然ニ消滅セリ蓋シ第
八條ハ將來此種ノ起業ニ付共同ノ條
護ヲ與ヘントノ同一主義ヲ明言シタルモノ
ナレハナリ近時ニ至リ合衆國ハフォン・セブス
ノバハマ運河ヲ起業スルニ當リ第一ニ千八
百八十一年六月二十四日ノ公文ヲ以テ倫敦駐

副ノ米國公使ニ家ヲ合衆國ハ此運河ニ
付歐洲ノ諸國ト共同ノ保護ヲ與フルヲ
得ス且ツ「クライトン」バ條約(第八條)ノ
廢棄ヲ申立テサルヘカラサルヲ宣言セリ
於是乎合衆國ト英國トノ間ニ又ニク文
書ノ注渡アリ英國ハ條約ヲ維持セシ
ト欲シ其條約上ノ權利ヲ主張セリ然
ルニ米國政府ハ遂ニ千八百八十二年五月
八日ノ公文ヲ以テ條約ハ總テノ部分ニ於
テ消滅シタリ而シテ將來其條約ヲ拘

束セラルヘキモノニアラサルヲ宣言セリ其
理由トシテ左ノ條件ヲ提出セリ

一「クライトン」バ條約ハ既ニ久シク合衆國ノ
政府及人民ヨリ不利益ノモノ且ツ失敗
シタルモノト認メラレタル事

二條約ハ總テ亞米利加ノ事項ニ適ス
ル所謂「モンロー」主義即歐洲ノ各國ハ
恰モ亞米利加ノ政府カ歐洲ノ事項ニ干
渉セサル如ク亞米利加ノ事項ニ干渉
スヘカラサルノ主義ニ矛盾スル事

三 英國政府ハ中央亞米利加ニ於テ英國ノ統治權ニ屬スルブリック、ホンダラスナル殖民地ヲ起シ以テ自ラ條約ヲ破リタル事

四 合衆國殊ニ太平洋諸國ハ近時異常ナ進歩ヲ為シタルヲ以テ中央亞米利加ヲ通過スル運河ハ合衆國ノ政治上商業上及兵事上ノ利害ニ關シ無量ノ價直ヲ得タルヲ以テ歐洲各國ノ利害ハ到底之ニ比較スルヲ得サル事

五 共同ノ保護ハ合衆國ノ安全ヲ危險ニスル事何トナレハ之カ爲ノ運河ニ於テ軍艦ノ屯所ヲ設ケ其他之ニ類スル設置ヲ爲サレハカラサル事

六 條約ハ西洋間ノ其他ノ新通路殊ニ既ニ存スルパナマ鐵道ニ適用セラレサリ

七 亞米利加ノ資本ハ條約締結以來大ニ増加シ亞米利加ノ獨力以テ運河ヲ造クルニ足ラレハ此條約ニ由リ歐洲ヨリ

注入スヘキ資本ノ補助ヲ要セサルニ至
リタル事

英國政府ハ米國ノ公文ニ對セル千八百
八十三年十二月三十日ノ公文ニ於テ前記ヲ
固ク執リテ動カザリキ然レモ合衆國ニ於
テハ「クライントンブルバ」條約ノ消滅シタル
ハ疑フ容レサル所ナリ然レモ此問題ハパナマ
ノ運河ニ關シテハ實際其事物ヲ失フ
ニ至レリ何トナレハ其後此運河ノ事業
モ亦失敗シ遂ニ之ヲ廢止シタルハナリ

是レ即先リ一方ヨリ條約ノ改正若クハ
廢棄ヲ申込ムモ他ノ一方之ヲ承諾セザ
ルヲ以テ其多派政府(合衆國)ハ他ノ一方
ノ反對アルニモ係ラス條約ヲ廢棄シ之ヲ
消滅シタルモノト宣言シタル場合ナリ
要スルニ亞米利加政府ノ主張シタル理
由ハ條約ノ締結以來事情ノ全ク變
更シタル及條約ノ規定ハ合衆國ノ歐
洲各國ニ對スル位地及利害ニ適セザル
ト云フニナリ

第四 千八百六十八年七月二十八日ノ合衆國及
支那ノ間ニ結ビタル條約（所謂「ブルリントン
條約」）ニ依リ西國共ニ其人民ノ國內ニ自由
ニ移住スルヲ許シタリ但シ移住ハ全ク東
洋若クハ脅迫（賣奴等）セラレサル一個人
ノ意思ニ基カサルヘカラサルノ制限ヲ置キ
タリ
此條約ハ米國ニ於テ既ニ久シク有害ノモ
トト認メラレタリ何トナレハ支那人ハ米國ノ
ニ支ニ對シ不利ナル競争ヲ爲シ又米人

ト共同ノ交際ヲ爲カス雖モ支那人ハ多
ク不徳義ノ目的ヲ以テ米國ニ輸送セラ
ルレハナリ
千八百七十八年ノ國會ニ於テハ支那人ノ移
住ヲ制限スルノ目的ヲ以テ（一艘ノ船ニ十五
人以上ヲ搭載スルヲ許サズ）一ノ法律ヲ採用
セリ元來院ニ於テハ人果シテ其法律ノ
正当ナルヤ否ヲ疑ヘリ何トナレハ一方ノ
院ハ豫メ條約ヲ改正若クハ條約ヲ廢
棄スルノ必要ナルヲ説キ又一方ノ院

ハ條約ハ其終了期限及変更ニ付キ一モ
定カレトナキヲ以テ各方ハ其自由ノ意見ニ
依リ之ヲ終了セシメ又ハ変更スルコトヲ得ル
ト主張スレハナリ

然レモ大統領ハ立法府ノ決議ハ條約
ヲ廢止スルニ至ラシムルヲ疑ハサルモ今支那
トノ關係ヲ妨害スルコトヲ欲セスレテ遂ニ法
律ノ發布ヲ拒ミタリ故ニ大統領ハ支
那ト改正談判ヲ開キ遂ニ双方ノ協議ヲ
遂クルニ至レリ然ルニ其後支那人ノ移

任ハ條約ニ依ラズ法律ヲ以テ全ク禁セラ
レタリ而シテ此事米國一方ノ意志ニ出シ
タルモノ、如シ何トナレハ支那政府ハ今ヤ
之ニ對シ支那在留ノ米人ニ應報ノ處分
ヲ爲サント欲スレハナリ唯遺憾ムラフハ之ニ
關スル必要ノ書類ノ坐右ニ存セサル
コトヲ

千八百八十九年九月廿五日

ヘルマン・ロエスレル

十月廿五日

「

...

...

...

...

...

...